

## ◆集団生活における怪我についての捉え方

原則として、こどもが自らの成長過程の中で自ら転んだりぶつかって怪我をしたり、友達との関わりの中で怪我をさせたりさせられたりすることを保育所が防ぐことはできません。もちろん「未然に予測はできなかったか」「環境的要因はないか」などの怪我の度に私達は振り返りを致しますが、怪我はゼロにすることを目標とするものではありませんので、責任を取る性質のものでないことはあらかじめご了承ください。怪我と事故は分けて捉えていただく様お願い申し上げます。

1～2歳児の成長段階において、様々な理由で噛みつきや引っ掻きをしたりされたりという時期が誰しもあります。まず関わる保育者の姿勢としては、こどもの情動について環境面や精神面などから考察し、よく話し合います。

行動の背景を探り、満たされていない部分があれば満たすことができる環境を与えます。園ではそのようにしてまず原因を考え、物的環境や人的環境づくりから取り組んでいきます。噛みつき等があった場合は、双方の保護者に申し伝えます。その上で、今後のお子様にとって最良の生活づくりがなされるよう日常的に配慮して過ごします。お子様の噛みつきが落ち着くまでは、なるべく未然に防げるよう私達も日々の保育を心がけて参ります。

例えば、我が子が誰かに噛みついた場合、叱ってやめさせるのではなく、痛いこと、やめてほしいこと、他の方法をして見せるなど、そのこどもに合った対応を、連続性を持って関わり、こども自身から変わっていく時を待つ姿勢が大事になります。

乳児期の噛みつき引っ掻きに限らず、集団生活においては全く誰も傷つけず誰にも傷つけられずに成長していくことはできません。幼児になっても引き続き、物の取り合いや喧嘩をすることから、譲り合いの優しさや待つ力、自分を守る力、友達との関わり方、そして「ありがとう」の心を学び取ります。こどもはそういったひとつひとつの実体験を自分の中に吸収し成長していきます。

例えば「ストーブが熱い」「ぶつかる痛い」「グラスを落とすと割れる」などの実体験があって初めて危険を回避する能力が身に付きます。取り返しのつかないような怪我や失敗は大人が全力で防いであげましょう。しかし、小さな怪我や失敗は大人が未然に防いでしまっただけではいけないと考えます。こどもの頃には、小さな失敗とそれを乗り越える知恵を繰り返し体験し、学び取ることが重要です。現社会では、実体験のないままに大人が事前に回避してあげる環境づくりが過度に進行しています。それにより危険を察知する能力（危機回避能力）が低下しているとも言われています。こども達は保育所で保護されているのではなく、まさに『生活』をしているのです。

もちろんお子様が傷つけられた時の親の気持ちは十分理解致します。園での様子については真摯にお伝えして参ります。喧嘩や怪我は今まさに健全に学び生きている証拠なのだと思え、我が子を頑張れと応援し見守る姿勢を皆様と共有していければと思います。よく噛んでしまったお子様のご家庭から、「先方に誤った方がいんでしょうか」と相談されることがあります。ケースにもよりますが、保育所としては双方の理解があればその都度の謝罪は不要と考えています。

噛みつきがあった際の具体的な処置としては、患部を流水に10分程度当てることで跡が残りにくくなります。そして、お互いに大きな怪我にならないように、爪の手入れはこまめにお願いいたします。爪が伸びていたり、とがっていたりすると相手に怪我をさせてしまいやすくなります。

そのような処置を行った場合はお迎え時にお知らせいたしますが、日々の生活の中でのやりとりなので、ちょっとした噛み跡やかすり傷などについて全てを報告することはできませんのでご了承ください。

ですが、気になったり不安な点があれば遠慮なくお声がけください。